

# わたしの視点

from JICA Leaders



K a n e k o

## 金子

JICA 理事

かねこ・たかし

1972年6月JICAの前身、海外技術協力事業団（OTCA）入団、90年10月インドネシア事務所次長、93年3月総務部広報課長、95年7月研修事業部管理課長、97年7月総務部総務課長、98年11月研修事業部長、2000年1月アジア第二部長、01年10月人事部長、03年10月独立行政法人国際協力機構人事部長、05年4月に理事就任。



スマトラ沖大地震・インド洋津波災害から約1年後の昨年12月、インドネシア・バンドアアチェで、市内の病院(上)や日本政府の拠出金で建設された仮設住宅(下)を視察する金子理事。アチェでは災害直後、JICAの帰国研修員たちが、国際緊急援助隊の活動をサポートしてくれた。JICAはそうした帰国研修員とのネットワークを強化する方向だ

### 国内事業はJICAの強み

JICAは「現場」を重視して、事業改革を推し進めています。その現場とは途上国にだけではありません。日本国内にもあります。つまり、研修や市民参加協力など国内事業の最前線です。

開発の現場は途上国にありますが、来日する研修員との接点から途上国を感じられる場所も、重要な現場だと思います。日本で、その場所を生み出していく拠点こそ、全国の国内機関です。現在、研修事業や青年招へい事業などで、年間約150万回・9000人も人が来日しています。彼らとの出会いを通して、異文化に触れ、価値観の違いとともに、共感する部分が多いことも教え

られ、世界観が広がる。これが国際協力の原点であり、また、ほかの援助機関にはない、JICAの特色、強みでもあります。その強みをもっと生かしていくために、国内事業改革を行っているわけです。

研修事業はJICA創立以来続いている事業ですが、かつては農業・漁業をはじめ幅広い分野で、基礎的な技術の移転に重点が置かれていました。近年はソフト型の研修や制度づくり、組織マネジメントなど、技術以外の分野のニーズが高まっています。技術を学ぶだけでなく現地や第三国でもできます。日本に来て、自国の制度や課題と比較検討する機会こそ、研修制度のメリットです。私たちは、日本でしか学べないもの、日本で行うことでより高い効果が得られる方法・コンテンツを提供していきたいと思っています。

また、来日研修員の中から次代を担うリーダーを見極め、信頼関係を構築し、日本と相手国を結ぶ重要な人材をネットワーク化するなど、戦略的な取り組みが求められています。そのためには、キーパーソンとなり得る適格者の人選が極めて大切です。



3月11日、「ピース・トーク・マラソン in 島根」に出席した金子理事。「世界と自分とのかかわりの中で自分ができることをするというスタンスが大切」と話した

もちろん私たちも、その人を滞日中も帰国後も「パートナー」として支援し、きずなを深めていく姿勢が必要です。改革とは、やり方や制度の

改善にとどまらず、当事者の意識、発想を変革し、夢を実現することだと思います。

### 魅力的な場所には魅力的な人を

市民参加協力事業では、4月に「JICA地球ひろば」を広尾にオープンしました。そこは、途上国や国際協力に関係する人、情報、ノウハウなどが集まる場です。これまでも全国の国内機関や国際協力推進員が市民参加の促進に努めてきました。今後は広尾が、全国のそういう場をより戦略的に充実・展開させる「拠点」として機能していくこととなります。JICAからの一方通行ではなく、さまざまな団体や人が交流し、一緒にその場をつくり上げ、さらに多くの人に活用してもらえものにしていきたいと思っています。

市民の皆さんには、その場に行つて、さまざまな刺激を受け、考えるきっかけをつくってもらいたい。良い刺激は、同質の中からは生まれず、異質なものにぶつかったときに生まれます。そこから、自分は何をしたいのか、何ができるのか、考えてほしいと思います。

こうした場所をより魅力的にするためには、まずJICAの職員が、途上国の課題と向き合い、国際協力の推進を通じて国際協力を追求し、世界観が広がられていくことに誇りを持たなければなりません。市民の皆さんにもっと国際協力を参加してほしいと思うならば、まず足元を見て、生き生きと活動する人が集まる組織にするため、最大限努力する必要があると思います。

### 現場は人間力を高める場

国内外問わず、現場には常に新しい発見があ

## JICAの強み、国内の現場を生かす改革を

JICAの改革プラン第2弾として進行中の国内事業改革。それはどのような理念の下に行われているのか。国内事業担当の金子節志理事に聞いた。

るん30年前のことですから、お互い顔は覚えていないのですが、話していると私が担当した研修に参加していたことが分かるんです。そうすると、当時の思い出話で盛り上がり、30年間の空白を埋めてくれる。こんな感動は、誰もが味わえるわけではありません。やはりJICAの現場、国際協力の現場に立つことで得られる特典です。

### 国際協力は一生涯の仕事

私は民間企業をやめてJICAに入り、最初の業務が研修事業でした。当時は職員が研修に同行したり、研修員と議論をする機会がたくさんありました。それは本当に楽しくやりがいがあり、この仕事は一生涯を懸けるに値する仕事だと思いましたね。今でも、途上国に出張したりすると、当時の研修員に偶然再会することがあります。もち

「第三国研修」は、途上国において、社会的あるいは文化的環境を同じくする近隣諸国から研修員を受け入れて行われる研修を、日本が資金的・技術的に支援するもの。

JICA職員はもちろん、市民の皆さんも、いろんな現場に赴き、多様な人と巡り会い触れ合う機会をもっと大切にしてほしい。1回限りの出会いで終わる可能性もあるでしょうが、私はいつも「今日が終わりはなくスタートです。またどこかでお会いできますよね」と言うようにしています。そうすれば、次につながる機会が生まれると思います。